

1930年代中国における日本人女性イメージの一考察

—『玲瓏』を手がかりとして—

楊 妍

はじめに

1931年3月18日、上海の三和出版社から一冊の週刊誌が創刊された。雑誌名は『玲瓏（れいろう）』⁽¹⁾。透き通った宝石のごとく美しいことを「晶瑩玲瓏」ということから理解出来るように「玲」も「瓏」も、どちらも「玉や金属、宝石などがお互い触れることで鳴る美しい音」を示す。

この『玲瓏』は本誌の趣旨を「高尚たる娯楽を提唱し、婦女の優美なる生活を増進する」（1933年3月18日創刊号、13頁）と掲げ、その誌面では当時の様々な大衆文化を紹介していた。殊に三和出版社が得手⁽²⁾としていたのは、当時のモダン女性に関する情報である。都会的に洗練された新女性に愛読されたこの雑誌には、奇しくも当時の日本人女性の紹介が数多く存在している。

筆者は、近代中国における日本人女性に対する認識を考察してきた。それにより、1920年代の中国女性雑誌では、日本人女性は「抑圧される者」のイメージで示されていたことを明らかにした。例えば、1915年創刊当初の『婦女雑誌⁽³⁾』では、良妻賢母養成を目指す傾向が強かったため、日本人女性は中国人女性より「良妻」、「賢い母」であることを評価する論調が見られる⁽⁴⁾。しかし、1919年の五四新文化運動の影響によって、刊行の趣旨は「良妻賢母の養成」から「婦女解放の提唱」へと改まり、日本では「女性運動はあまり発展していない」、日本女性は「旧式女性」であるというマイナスイメージが強調されていた⁽⁵⁾。

そして、かかる研究に取り組む上で注意を要するのが、時代的变化——つまり動態の把握である。他の時代に比べて近代は、社会文化の時代的变化が甚だしい上に、1930年代の中国は国民政府の全国統一や日中関係の悪化などがあり、特にその傾向が顕著である。そのため時々刻々と変化する当時の状況を正確に且つ包括的に把握することが困難であった。

このような経緯から筆者は同時代資料としての逐次刊行物に着目している。これにより特定の雑誌を網羅的に検証することで一定の視点から観察すること

ができるほか、週単位で記録されるという週刊誌『玲瓏』の特性は、本研究にも極めて有益に作用するものと言える。

以下小論では、1930年代中国における日本人女性に対する認識と、その動態に関する研究の一環として、『玲瓏』掲載の日本人女性の記事に焦点を当てる。そして雑誌の編集者層にいかなる日本人女性のイメージが形成され、変容して行くのであろうか。その基礎的な考察を試みたい。

一. 『玲瓏』の資料的性格と問題の所在

当時の中国人女性にとって、『玲瓏』とはどのような存在であったのか。これについて、小説家の張愛玲は、以下のように記している。

1930年代の女子学生なら誰もが手にしていた『玲瓏』は映画スターの美しさの秘訣を伝授しつつ、「美」を心得た女性がどのようにして男性のアプローチから身を守るのかを説いた⁽⁶⁾

本誌はいかなる読者層を想定したかは、当時の出版社の刊行雑誌の構成から理解出来る。例えば三和出版社は、『玲瓏』の他に『家庭良友』という女性向け月刊誌も刊行していたが、本誌は20代以降の既婚女性を対象としている。その点からも『玲瓏』は10代後半の女子学生、そして20代の未婚女性を読者層とすることで雑誌の棲み分けが行われていたものと想像できるほか、前掲の張愛玲による回想も、かかる傾向と軌を一にしている。

『玲瓏』は1931年に上海の三和出版社によって創刊され、1937年に日中全面戦争の勃発に伴い停刊した。中国の女性雑誌の殆どは発行期間が短く、『玲瓏』のように7年間も刊行を続けた雑誌は非常に少ない⁽⁷⁾。当時同誌が女性読者の熱い支持を得ていたことが読み取れる。『玲瓏』の内容は政治・社会問題から科学知識、民俗、映画、演劇、文学、美術、撮影、体育、漫画に至るまで極めて幅広く、女性はもとより男性をも広く読者対象とした。編集長の中で唯一の女性であった陳珍玲⁽⁸⁾は、「姉妹たちへ」という記事で以下のように書く。

それ（『玲瓏』・著者注）はわが国の婦女の唯一の代弁者であり、我々の苦痛と苦悶を解決し（中略）内容はこのように豊富であるので、まさしく婦人を導く唯一の活路であり、『婦女必携』ということができる⁽⁹⁾。

このように『玲瓏』は雑誌刊行を介して、「我が国の女性の代弁者」を標榜していたことがわかる。同誌の販売部数は不明であり、当時の中国社会にどれほどの影響力・発言力を有したのかは、今後検討を重ねる余地がある。しかし当時としては破格とも言える発行期間の長さ、中国はもとよりアジア各地でも販売されたという指摘⁽¹⁰⁾からも、当時の中国人女性なら、誰もが手に取りたいと思わせる魅力を備えていたことが想像できる。『玲瓏』については、これまで李克強⁽¹¹⁾をはじめ、孔令芝⁽¹²⁾や呉桐⁽¹³⁾らの先行研究があり、何れも同誌の中に現れたモダン女性のイメージの分析に重点に置く。また、米井由美⁽¹⁴⁾の研究では、読者層と通信欄を中心に分析し、章霏琳⁽¹⁵⁾の研究では『玲瓏』の編集状況の変遷を重点的に論じている。これまで、『玲瓏』に描写された日本人女性を対象とした研究は数多くなされてきた。

かかる先行研究を踏まえた上で『玲瓏』の記事内容を再度確認すると、意外な傾向が二点看取できる。その一つが西洋文化の無批判的な受容に対する強い警告である。

例えば本誌では海外の新思想や、各国女性の状況に関する記事を数多く掲載しているものの、編集長である林沢民は「現代のヨーロッパ諸国では、文明を称しているが、その文明について考察すると、その起源の歴史は殆ど我が国より後である⁽¹⁶⁾」と記す。また、「むやみに自我を放任」させる欧州の女性については、「我が国の女性はこれについてどのような感想を持つのか？」と読者である中国人女性に疑問を投げかけている。

そこで筆者は『玲瓏』に掲載された外国人女性に関する記事内容を調査し、日本人女性に関連する記事総数は46件に上ることが分かった（表1参照）。この記事数からも『玲瓏』で紹介された日本人女性は、多かれ少なかれ中国において一定の影響を及ぼしたと考えられる。

そして第二の傾向として日本人女性に対する評価が指摘できる。

衆知の如く1931年には満州事変（九・一八事件）が、1932年1月からは第一次上海事変（淞滬抗戦）が発生した。事変を契機として日本軍が上海に進駐し、上海市内も戦場となった。しかし当時の『玲瓏』記事では、日本軍の進駐を批判しながらも、「我々は日本人を心から憎んでいるが、あのような尚武精神を持つ女子学生に対し、実にことばにならぬ敬意を抱いている⁽¹⁷⁾」と日本人女性に対する評価を変えることがなかったのである。

この点は本論のコンテクストと異なるため、現時点の見解のみ略述する。即ち、本誌は、日本人女性と、日本という国家とを一線を画して是々非々の態度

で扱っており、その上で当時の日本人女性の社会進出の姿勢を評価し、本誌も日本人女性を範として中国人女性も積極的に社会に進出し、女性の方で社会に貢献すべきという主張を展開している。当時の中国の言論界では極めて珍しい視点であるが、この問題は稿を改めて詳述することとしたい。

二. 『玲瓏』の創刊とその背景

本紙の編集内容は、編集者が最も重要な役割を果たした⁽¹⁸⁾。『玲瓏』が7年間近く発行できたのは、編集者らの力によるものだと考えられる。そこには、都市文化の最前線で活躍していた著名な写真家、漫画家、翻訳者及び評論家があり、共通の精神と専門知識を駆使して雑誌の成功を促進していた。

『玲瓏』の編集長は、上海の聖ヨハネ大学 (St. John's University) を卒業した写真家の林沢蒼 (1903 ~ 1961年) である。林沢蒼は福建人で、自ら三和出版社を創設し、グラビア雑誌の『撮影画報』と映画雑誌の『電声』という二つの刊行物の編集に携わった経験があった。その先進的な刊行理念を形成したのは彼が『玲瓏』を立ち上げた時期であったと言われる⁽¹⁹⁾。

他誌と異なり、『玲瓏』の創刊号には発刊の辞が書かれておらず、巻末に編集者である陳珍玲が所感を略述する形式を採用した。さらに第100号記念号の冒頭記事からは、創刊当初の『玲瓏』がそこまで雑誌の発行状況を重視されていなかったことが読み取れる⁽²⁰⁾。

また、『玲瓏』のもう一つの特徴として、表紙が独自にデザインされたことが挙げられる。ほぼ毎号表紙を飾る当時の上海の名媛や女学生の写真は、女性読者の美や物質への追求を象徴するものであった。さらに、大胆な西洋女性のヌード写真や華やかな商品広告も女性読者の目を引いた。これらは、流行最先端のモダン都市である上海における国際性を象徴しているとも理解出来る。同誌の編集者は、しばしば読者に「貴方達は国家と社会の未来に重大な責任を負っていることに思いを致すべき⁽²¹⁾」と呼びかけている。これらの発言は若い女性読者の大きな反響を呼び起こした。

さて1931年2月『玲瓏』の第16号に、初めて日本人女性が登場している。西洋のモダン女性に関する記事ではボディラインの掲載が多かったのと異なり、日本のモダン女性の説明では女性の多様性が表現されている点で対照的である。政治的には日中両国間の緊張関係にある中でも、この時期から『玲瓏』における日本人女性への関心は徐々に高まりつつあった。そうした中で第一印象としての日本人女性のイメージが、当時の中国知識人にとってどのような影響を与

えたのかについて、次の節で検討したい。

三. 「日本人女性」の身体表現

『玲瓏』においては、女性解放問題や恋愛・結婚に関する議論の外に、家庭と衛生に関わる最新の知識なども掲載されている。また、欧米で流行している化粧品の紹介や、家庭日用品の広告、都市女性の動向などの情報も提供していた。このようなメディアの発達とともに、1930年代の上海の知識人界では、女性は胸、太もも、腰など身体の部位を露出してはいけないという「伝統的」な儒教的規範が否定され、女性を主体とした「近代的」な消費文化が発展し、心身健康なイメージを持つ女性像が現れるようになった。

例えば、『玲瓏』創刊号の「運動と中国」という記事の中で、「わが国の女子は、近頃運動に対して、徐々に注意を払うようになってきているが、いまだに普及していない（中略）軽い運動をすることにより、身体は必ず健康になる⁽²²⁾」と女子の運動の必要性を説いている。こうした言説は、「東亜病夫（東アジアの病人）」という西洋由来の呼称を巡る中国人の劣等感に根ざしているものと思われる⁽²³⁾。そのような認識は、中国人という集団、さらに個人の身体へと重ね合わされたと言える。20世紀初頭には、女性の身体の弱さを克服するために、体育が学校教育の一部分として日本から導入され、健康な「身体づくり」が注目され始めた。

このように、欧米女性だけではなく、日本人女性の「身体づくり」もまた、当時の知識人の関心事となっていた。『玲瓏』の中からそれに関連する記事を見てみよう。「亡くなった日本女子運動家」という記事には、「（人見絹枝・著者注）女士は日本の大阪毎日新聞社記者として、職業女性として、体育に熱中し、日本婦女界の精神を、全世界に掲げることができた。我が国の姉妹はそれを聞いて恥じないでいられようか⁽²⁴⁾」という指摘が見える。また、別の記事では、日本労働女性の身体が、豊満で健康的であることを称賛する⁽²⁵⁾。1930年代以降、自然に突出した胸に美意識が求められるようになり、胸を縛ることに反対する動きが起こる。新たな美意識は、中国の女性雑誌に大いに反映されることになった。日本人女性のこうした身体表現は、『玲瓏』の中で、女性の解放を表象するものと解釈されたのではないかと考えている。

「纏足」の廃止など、身体解放の機運が高まると、中国人女性の美しさの基準は、病弱から健康へと推移していったのである⁽²⁶⁾。こうした身体解放の言説は、「東亜病夫」という西洋由来の呼称に纏わる中国人の劣等観に根座して

いる。その「病夫」というイメージは中国人自らによって、さらに女性の身体解放へと重ねられた。そして、国家や男性の目線とは異なり、女性自身の解放を表象するように解釈されていった。

身体解放に関するもう一つの記事では、「日本軍閥は、どこにでも専制的な手段で、民衆を抑圧し、女子の生育でさえも、監視されています。その獐猛な顔つきが、想像できます⁽²⁷⁾」と指摘する。ここでは、日中関係と日本人女性とは別のものとされ、批判と非議は日本国家に対して行うべきであり、日本人女性とは無関係であると見做していると考えられる。

また、女性の外見について記されたイメージをまとめれば、「体育を重視し」と軍国主義の影響を指摘すると同時に、「美的観念が高い」という理解も見られる。それについて、沈詒祥が「現代婦女は何故以前の婦女より美しいか?」という記事の中で現代女性の外見的特徴を説明する。記事では美容学の研究が現代女性の生活の重要な部分となって個人のイメージを向上させただけでなく、生活改良を推進していく上で、男性知識人らに、美容を中心とした新しい知識を積極的に取り入れ普及する役割を期待した⁽²⁸⁾。この時から、化粧という観念は、社会的な視点まで引き上げられたことが分かる。

『玲瓏』にはスキンケアと化粧の仕方に関する記事が多くあり、ここで当時女性の外見への関心の高さが窺える。また、「日本女子と白粉生涯」という記事では「白粉は女優と売春婦のために作られた専門品と言われていました。今はそんなに人気があるとは思っていませんでした⁽²⁹⁾」と日本人女性で白粉の使用が一般的であることを紹介する。

我が国の女性は日本人女性のように白粉を消費していないが、香水と脂粉は日本人女性より多く使う。また、日本人女性が使う装飾品は全て国産品だが（中略）我が国の女性は国産の化粧品を捨て、外国商品を購入することで得意になるが、これは日本人女性と根本的に異なり、極めて恥ずべきことだ⁽³⁰⁾。

白粉を大量につけた日本人女性のモダンな外見より、彼女ら自身の戦争への準備や愛国心の強さを宣伝することに『玲瓏』は多くの誌面を割いている。これは、日本の女性のほうが、中国人女性よりも勇気があり、積極性があるということを示していた。即ち、愛国心のあるという観点から見れば、日本側に優位性があり、さらに中国人女性に総動員を呼び掛け、「我々の女同胞は（日本

人女性)のようになれるのか⁽³¹⁾?」という疑問を読者に問う。

以下では、当時の中国知識人が日本人女性との接触を通じていかなる日本人女性イメージを形成したのか探るために、『玲瓏』の記事を対象に分析を行う。雑誌記事は簡潔記述を特徴としているが、日常生活に関する記録が幅広い点において日本人女性イメージの全体像を把握するのに有効と思われる。

四. 「日本人女性」のイメージ

4.1 『玲瓏』にみる日本人女性像

表1に示した通り、『玲瓏』の中では日本人女性について記述しているところは全部で46箇所である。そのうち、広義の「日本人女性全体」を指す場合は17箇所であるが、そのイメージが肯定的なものは僅か6箇所に過ぎない。当時の日本は「欧化政策」を実施して50年になるが、女性の地位はあまり変化せず、「良妻賢母」たることが求められた。日本では女子教育が普及し、中国の纏足などのような悪習がなく、健康的であり外観も中国女性より自由であったが、一方で社会的な地位を得るべきであるという思想が極めて薄かったために、中国知識人は日本人女性に対して冷たい視線を向けたと考えられる。

また、個人としての日本人女性を紹介する記事は、前後23件にも上り、女学生、知識女性、労働女性、女性兵士、主婦などが登場する。「美しく勤勉」など、肯定的な評価を与えられた日本人女性像が浮かび上がってくる。職業女性、売春婦は他国と比較しながら、「日本人女性の地位はどの国と比べても低い」など、そのイメージがやや否定的なものとなっている。

一方、民族レベルで記された日本人女性のイメージをまとめれば、「愛国心が強く、忍耐力に長け、勤労と、体育を重視する」と文明化が進んでいると同時に、社会においては「男性の付属品」でしかないという、不満と失望が描かれた。また、蒋介石が提唱した「新生活運動」の影響により、「生活は単調で規律がある」一方、「きちんと家庭を管理できる」ゆえ「良妻賢母の模範」であるという日本人女性のイメージが伝えられた。日中関係の悪化により、中国人に対して「残忍非道」である存在として日本人の全体像が作り上げられたが、同時に日本人女性はそれと異なる、「可憐で勤勉な存在」として描かれた。

ところが、同時期の日本女性紹介記事に目を向けてみると、「受動的」「反抗しない」「束縛される」という特徴を、『玲瓏』はとりわけ力を入れて報じている。同時に、日本人女性に関するイメージは1934年の新生活運動を境に変化する。次節では、新生活運動を経たその変化について見てみたい。

表1. 『玲瓏』に掲載された日本女性関連記事一覧表（1931～1937年）

注：記述性質の欄では、「○」は肯定的な、「×」は否定的な、「△」は中立的な評価を示す。

| 巻号 | 発行年 | 表題 | 日本語訳 | 記述対象 | 主なイメージ | 記述性質 |
|-------|-------------|-------------|----------------|-------|---------------------------------------|------|
| 第22号 | 1931年8月12日 | 死矣日本女運動家 | 亡くなった日本女子運動家 | 女運動家 | 体育を重視する | ○ |
| 第50号 | 1932年5月18日 | 中日之婦女職業 | 日中女性の職業 | 女子 | 日本女性は自由に職業を選べない | × |
| 第67号 | 1932年9月14日 | 日本無産婦女 | 日本無産婦女 | 女子 | 日本無産階級女性の紹介 | △ |
| 第71号 | 1932年10月19日 | 日本の娘子軍 | 日本の娘子軍 | 女性兵士 | 愛国心が強い | ○ |
| 第82号 | 1933年1月18日 | 妓女世界的日本 | 妓女世界の日本 | 売春婦 | 日本女性は100人のうち3人が売春で生活しなければならない | × |
| 第82号 | 1933年1月18日 | 教授夫人当汽車夫 | 教授夫人が運転手になる | 知識女子 | 家計に協力する | ○ |
| 第86号 | 1933年3月1日 | 日本売淫業在滬之發展 | 日本の売春業の上海での發展 | 売春婦 | 日本は本来淫風とても盛んである | × |
| 第89号 | 1933年3月29日 | 處在被動地位的日本婦女 | 受動的な地位に立つ日本婦女 | 女子 | 日本女性は完全に男性に服従しなければならない「人間」と見做されている | × |
| 第95号 | 1933年5月17日 | 日婦女界之厭戦 | 日本婦女界の厭戦 | 女子 | 日本女性は戦争を嫌悪する | ○ |
| 第109号 | 1933年9月6日 | 日本女學生之趨向 | 日本女子學生の傾向 | 女學生 | 頭腦明敏かつ単純な學生は共產主義の路を歩むが、成績低下の學生は情欲を求める | △ |
| 第121号 | 1933年11月22日 | 日本婦女職業界近状 | 日本婦女職業界最近の状況 | 職業女子 | 日本女性の就職が男性より少し簡単である | △ |
| 第123号 | 1933年12月6日 | 日本中下社会之婦女 | 日本中下層社会の婦女 | 中下層女子 | 勤勉かつ自己犠牲精神が高い | ○ |
| 第137号 | 1934年4月18日 | 日本女子对貞操之壞習慣 | 日本女子の貞操に対する悪習慣 | 女子 | 中国女性に比べて日本女性は貞操を重視しない | × |
| 第150号 | 1934年8月15日 | 職業婦女在東京 | 東京の職業婦女 | 職業女子 | 日本の新時代女性は日本の家庭制度を好まない | ○ |
| 第153号 | 1934年9月19日 | 日本女子的家庭觀 | 日本女子の家庭觀 | 女子 | 結婚したい女性は60%を占める | △ |
| 第160号 | 1934年11月14日 | 日本婦女生活概述 | 日本婦女の生活概述 | 女子 | 日本女性の生活は男性によって支配されている一方、経済難という問題もある | × |
| 第167号 | 1935年1月9日 | 日本の女賣票員 | 日本の女子切符売り | 職業女子 | 日本女子切符売りの採用標準は、端正な顔立ちと活発な性格である | △ |
| 第174号 | 1935年3月6日 | 日本の甜姑娘 | 日本の甘い娘 | 職業女子 | 日本女子店員の必須条件は、健康な身体と綺麗な顔である | △ |
| 第176号 | 1935年8月7日 | 一個日本交際花の告白 | 日本のある社交界の花の告白 | 女子 | 日本のモダン女性は、国家觀念が極めて強い上、勤勉かつ儉約している。 | ○ |

| | | | | | | |
|-------|-------------|------------|--------------------|------|--|---|
| 第182号 | 1935年5月8日 | 日本之女人公司 | 日本の女子会社 | 職業女子 | 日本女性の地位はどの国と比べても低いのに、女性の手で会社を創立することは奇跡である | △ |
| 第221号 | 1936年1月22日 | 日本新娘学校 | 日本の花嫁学校 | 女子 | 花嫁学校の課程では、国防の授業が追加された | ○ |
| 第227号 | 1936年3月11日 | 千葉県底海女生活 | 千葉県の海女生活 | 労働女子 | 日本労働女性の身体が、豊満で健康的であることを称賛する | ○ |
| 第234号 | 1936年4月29日 | 日婦女崇拜印度美男子 | 日本女性がインド人の美男子を崇拜する | 女子 | 日本女性の弱点として、外国人を崇拜することを挙げる | × |
| 第243号 | 1936年7月1日 | 日本的婦女生活 | 日本の婦女生活 | 女子 | 高等学校では実用を偏重し、料理、家事といった科目を重視し、良妻賢母の養成を目的に、将来の結婚に備えている | ○ |
| 第244号 | 1936年7月8日 | 日本女子の衣帯 | 日本女子の上帯 | 女子外観 | 日本女性の服装は、日本女性の不自由を象徴する | × |
| 第245号 | 1936年7月15日 | 日本婦女の消遣 | 日本婦女の娯楽 | 女子 | 日本女性の良妻賢母主義は世界でも有名である。 | △ |
| 第245号 | 1936年7月15日 | 日本婦女の観察 | 日本婦女の観察 | 女子 | 中国女性が日本女性に学ぶべき点として、「規律」、「節約」、「勤労」を挙げた | ○ |
| 第246号 | 1936年7月22日 | 日本女子の塗粉工程 | 日本女子の白粉の塗り方 | 女子外観 | 日本女性の白粉の塗り方は実際に大きな作業 | △ |
| 第248号 | 1936年8月5日 | 女子的開襠褲 | 女子の股割れズボン | 女子外観 | 日本女性は大きな上着を着ているが、下着を着ていない | △ |
| 第251号 | 1936年8月26日 | 日本女生的五熱 | 日本女子学生の五つのブーム | 女学生 | 「書道」、「仏教信仰」、「満洲に行く」、「撮影」、「スポーツマンに夢中」という日本女学生の5つのブームを紹介した | △ |
| 第253号 | 1936年9月16日 | 日本女子の職業 | 日本女子の職業 | 女子 | 「広告モデル」、「案内娘」など日本女性の新興職業を紹介した | △ |
| 第258号 | 1936年10月21日 | 美國大学里の一門科目 | アメリカ大学の一つ科目 | 女子 | 日本に新設された「花嫁学校」は、専ら結婚に関する一切の知識を女学校から出たばかりのお嬢様たちに教授する。 | ○ |
| 第260号 | 1936年11月4日 | 日本女子擇夫測驗 | 日本女子の婿選び試験 | 女子 | 公務員の男性は日本で女性に人気がある | △ |
| 第268号 | 1937年1月6日 | 愛嫁外国人 | 外国人と結婚することが好み | 女子 | 日本女性が外国人と結婚することを望む。その理由は、日本男性があまりにも女性を奴隷扱いするからである | △ |
| 第269号 | 1937年1月13日 | 日本的藝妓 | 日本の芸妓 | 芸妓 | 日本男性は恋している芸妓の前に贅沢に振舞う | △ |
| 第271号 | 1937年1月27日 | 日本女人與草履 | 日本女子と草履 | 女子外観 | 日本女性の愛嬌と気高い品性を称賛する | ○ |

| | | | | | | |
|-------|------------|----------------|-----------------|-------|--------------------------------|---|
| 第272号 | 1937年2月3日 | 日本模特兒的起因 | 日本のモデル誕生の原因 | モデル | モデルとなるために必要な条件は端正な外見かつ溫柔な性格である | △ |
| 第273号 | 1937年2月10日 | 日本女子の貞操問題 | 日本女子の貞操問題 | 女子 | 日本では道德教育の失敗により日本女性の貞操問題をもたらした | × |
| 第276号 | 1937年3月10日 | 寄宿舎生活的内幕 | 寄宿舎生活の裏話 | 女学生 | 女学生寄宿舎生活の同性愛問題を紹介した | △ |
| 第278号 | 1937年3月24日 | 日本女大學生之苦悶生活 | 日本女子大學生之苦惱生活 | 女学生 | 日本女学生は恋愛問題を厳しく管理される | △ |
| 第282号 | 1937年4月21日 | 日本の主婦 | 日本の主婦 | 主婦 | 日本の主婦の生活は単調だが、非常に規律がある | ○ |
| 第283号 | 1937年4月28日 | 日本藝妓と女招待一齊國防運動 | 日本芸者と女給が国防運動へ加入 | 芸妓・女給 | 日本の芸妓と女給は自分の収入から一部を出して国家に貢献する | ○ |
| 第289号 | 1937年6月9日 | 女活招牌在日本 | 日本の看板娘 | 看板娘 | 何よりも綺麗な顔立ちが看板娘としての必要な条件である | △ |
| 第289号 | 1937年6月9日 | 日本女博士的婚嫁難 | 日本女性博士の結婚の難しさ | 知識女子 | 学業にある程度修養があるので、男女間の情欲も淡泊である | △ |
| 第291号 | 1937年6月23日 | 日本女子與白粉生涯 | 日本女子と白粉生涯 | 女子外観 | 日本女性が使用している化粧品は全て日本製である。 | ○ |
| 第297号 | 1937年8月4日 | 日本女學心目中配偶 | 日本女學生の心の中配偶者 | 女学生 | 日本女学生は配偶者を選ぶ際に、健康を第一条件とする | △ |

4.2 日本女性への認識の変化

前述したように、そうした日本人女性イメージの形成に、日中の軍事的対立が影を落とした形跡は殆ど見られない。しかし、『玲瓏』のある編集者は、日本の情勢を見て「いわゆる愛国は、暴力的に他人を侵略することを指すのではない。国家の繁栄のためには、必死に努力すべきだが、強盗のように他人のものを略奪するのは恥ずべき行為であり、強国の策略ではない（中略）日本人女性はこの点に全く思い至らない⁽³²⁾」と述べる。日本人女性の愛国心が男性に利用され、不平等な状況を忍耐しているところについては、複雑な感情を抱えていたに違いない。

この時期から、『玲瓏』における日本人女性のイメージとして「男性の付属品」であることが強調されるようになってくる。「簡単に言えば、現在の日本人女性は完全に受動的な地位にある。男性の意図に対して彼女らは半ば盲従し、半ば屈服して、抵抗の意志を示すこともほとんどできない。このような抑圧に対して反抗をしないという遲滯性は、また人々に失望を感じさせる点である⁽³³⁾」と記されている。『玲瓏』に取り上げられていたのは、日本社会に残存していた伝統的な家父長制の抑圧のほうであった。

一方、当時の時代背景として注目すべき変化として、1934年2月19日、蒋介石が南昌において発動した新生活運動⁽³⁴⁾がある。新生活運動の背景には復古思潮が存在した。このことは①「婦女回家」の主張、②官庁等における女性職員の解雇、③異装奇服の取り締まり、④モダン女性への非難、⑤良妻賢母型の女性観の称揚など、社会文化生活の様々な側面から窺える⁽³⁵⁾。そのうち「良妻賢母型の女性観の称揚」は伝統文化の復興であったことを見逃すことはできない。

蒋介石は1934年5月に発表した「新生活運動綱要」の中で、中華民族の「修身・齐家・治国・平天下」を最も重要な要素であると強調した。日本の明治維新の成功を「儒家文化の精華を吸収した成果である」とし、模倣すべき例とした⁽³⁶⁾。そのために、国民政府が示した「新女性」の特徴は、民族復興に対して女性が重要な責任を負うべきであるとしたことである。また、国家が必要とする新時代の女性像は、家庭の中心であるとされ、伝統的な美德や新式の職業訓練との関連から形成された。

それに従って、『玲瓏』の「モダン女性」像は徐々に現代女性から現代主婦へと変化し、多くの記事では、家庭に引き戻された女性の、母性役割を強調した。例えば、同誌はかつて日本女性の生活スタイルは「男性の命令に従う」ものであると紹介していたが、1937年4月21日の「日本の主婦」という記事では、「単調だが、非常に規律ある⁽³⁷⁾」と初めて首肯される。このような認識の変化は、当時蒋介石が提唱していた復古思潮や新生活運動と関連すると考えられる。

そして、1936年の「日本婦女の観察」という記事では、日本の社会制度、教育、生活などの多方面にわたって日本人女性のプラス面を取り上げて紹介する⁽³⁸⁾。この記事では日本人女性の特徴として「紀律・節約・勤労」を挙げるが、これは新生活運動が主張とした「整頓・清潔・簡単・迅速・確実」に適うものであったと思われる⁽³⁹⁾。日本人女性の特徴は「中国の旧道徳から抽出された精華⁽⁴⁰⁾」としての日本に倣って行われた生活改善運動のもとで、積極的な評価を与えられる必要があったのだろう。

また、「教育の面」では、1932年の『玲瓏』には「女学生卒業後の進路」という記事が掲載され、そこで女学生には「もっと高いレベルの学校へ進学すること」、「社会に出て、職業婦人になること」、「家庭に入ること」という3つの道があると指摘されている。その記事によれば、家庭は社会と国家の基礎であり、良好な家庭組織があってこそ、社会に堅固たる基礎が築かれ、希望ある国家が建設できるという。

当時の上海では、中国の実業家や維新派によって女学校や女子高等教育機関が設置されたが、入学できたのは少数の裕福な家庭の娘だけであった。1950年代まで、女子学生は新しい科学知識によって効率的に家政をこなせる「良妻賢母」の予備軍とみなされ、大きな期待が寄せられていた。

同時期の日本の女子教育紹介記事に目を向けてみると、「完全に良妻賢母の育成を中心としており、高等女学校は料理、家事等の科目を重視し、将来の結婚の準備としている⁽⁴¹⁾」という認識があった。1933年の「受動的な地位に立つ日本婦女」という記事では、「日本女子はより一層笑うべき矛盾した人間で、彼女らは十分な教育を受けたにもかかわらず、依然として祖先から伝えられた児女経をあがめ奉り、女性の規律を遵守し、男性を神聖で服従しなければならぬ人間だと見做している⁽⁴²⁾」と紹介する。

『玲瓏』に掲載された「日本新娘学校」、「美國大學里の一門科目」、「日本女子擇夫測驗」などの記事によれば、日本女性は男性に依存する旧観念を持っているのではなく、理想的な結婚をするために、家計簿の作成など家政管理の能力や、夫の仕事を助ける能力が要求されていたとする。これら記事の最後には「中国の専科以上の学校にも、日本に倣って結婚科を設立すれば、よいことではないだろうか⁽⁴³⁾？」「花嫁学校に行つて家事を学ぶので、日本女性はきちんと家庭を管理することができる⁽⁴⁴⁾」という感想が書かれ、現代主婦の養成を呼び掛けている。

呉咏梅によれば、そもそも伝統的な中国社会では、家庭や主婦などの概念は存在しなかった⁽⁴⁵⁾。家庭は生産活動の基本単位であり、そこでは労働力が必要とされた。伝統的な大家族の女性は、単に男性の従属物として生きるだけでなく、大家族を構成する複雑な人間関係を処理しながら、伝統的な規律に従うことが求められた。

当時の上海では都市部を中心に、夫婦とその子どもから構成される核家族型の家庭スタイルが広まるようになった。上海女性の一般的な形態は、単純な労働力ではなく、知識を持つ専業主婦であったという⁽⁴⁶⁾。そのような主婦らは、少なくとも中等以上の教育を受け、社交に参加し、夫の収入で消費生活を楽しんでた。彼女らは近代上海の消費生活を支える重要な存在であると同時に、小家庭が形成されると、主婦としての女性の責任は「幸せな家庭を作る」ことになった。

このように、1936年以前の日本女性に対して、『玲瓏』の編集者らは「良妻賢母」主義という構図として、非常に厳しい見方をしたが、新生活運動の進行

によって彼らの態度が変わり、「家事の巧み」な日本人女性に対する期待と憧れを述べるようになった。この後、『玲瓏』に日本人女性の認識が紹介される際には、「節約」、「勤労」と「優しさ」が伝えられることになった。以上から、『玲瓏』上に表れた日本の女性認識の変化は、中国社会情勢の影響に応じて進行したものであると結論付けられる。

終わりに

小論では1930年代の中国における日本人女性のイメージについて、当時の代表的な女性雑誌である『玲瓏』を中心に分析し、その背後にあるものを考察してきた。

本稿で得られた知見は、主に以下の4点にまとめられる。

I 『玲瓏』は、「我が国の女性の代弁者」を標榜し、1930年代における中国の女性読者から大きな注目を集めるという女性向け雑誌として刊行された。

II 『玲瓏』では女性の美容法やファッションが紹介されたほか、健康など「身体づくり」を目的とする記事が掲載され、どのようにすれば、健全な思想や健康な身体を持つ理想的な女性になれるかを提示していた。そして、日中戦争の下では、『玲瓏』が提示した日本人女性の身体は、ナショナリズム的な特質と結び付けられる形でイメージを付与された。一方で、愛国心という面では、中国人女性より優位性があることが指摘された。

III 本誌によると、当時の日本人女性は不幸な状況にあり、それを取り巻く最も重要な原因は日本社会にあると指摘しているものの、本誌における日本人女性への興味関心は極めて高く、多くの記事は日本人女性を「気高くて優しい」存在と肯定的に論評する一方、社会進出を果たした日本人女性の職業について詳細に取り上げていた。

IV 『玲瓏』に掲載された日本人女性のイメージにも、時期的な変化が確認された。例えば初期の雑誌には日本人女性は「男性の付属品」であることが強調された。しかし1934年以後は新生活運動の推進により、「婦女回家」がスローガンになると、『玲瓏』の中の理想的な日本人女性像も徐々に、「幸せな家庭づくり」という責任を担うものとされていった。

それと対応するように、『婦女雑誌』で日本人女性は「弱い」「抑圧されている」というイメージで描かれていたのと異なり、『玲瓏』の編集長と執筆者らは日本人女性について、儒教的な伝統文化による抑圧を強調せず、彼女らの「節約」、「勤労」という精神を中国人女性読者の見本として示した。

『玲瓏』の日本人女性イメージは、男性の編集者による女性の表象であったが、読者の大半を占める中国人女性は異なる観念を持っていたのではないかという疑問も生じる。『玲瓏』に寄せられた読者の発言を検討することを今後の課題としたい。

注

- (1) 本稿では、米コロンビア大学附属図書館所蔵コレクション「Ling long Women's Magazine」(<https://exhibitions.library.columbia.edu/exhibits/show/linglong>)を使用した。1931～1937年の全298期のうち、57期の欠号がある。
- (2) 「発行元である三和会社は、『玲瓏』以外に、映画雑誌の『電聲』、ビジュアル・イメージが中心の『攝影畫報』など、モダン文化を紹介する雑誌も発行していた。これは、会社の創設者である林澤蒼が、都市モダニズムにも馴染んだ写真愛好家であることとも関係している。」呉桐、「1930年代中国におけるモダンガールの身体表象－女性誌『玲瓏』を中心に－」、『京都大学大学院教育学研究科紀要』66号、2020年、263頁。
- (3) 『婦女雑誌』は1915年1月から1931年12月まで17年間にわたって刊行された近代中国を代表する女性向け雑誌である。創刊当初の『婦女雑誌』は旧式男性知識人の認識に基づいて女性読者に「良妻賢母」であれと呼び掛けたが、1920年代に入ると五四新文化運動の影響によって女性問題を議論する場となった。
- (4) 允梅・蔚南、「我之日本婦人觀」、『婦女雑誌』第5巻第1号、1919年1月、95頁。
- (5) Y. D.、「日本婦女團體及婦女運動者訪問記」、『婦女雑誌』第8巻第3号、1922年3月、272頁。
- (6) 原文「1930年間女學生們人手一冊『玲瓏』雜誌就是一面傳授影星美容秘訣一面教導『美』了『容』的女子怎樣嚴密防範男子的進攻」、張愛玲、『流言』、五洲書報社、1946年、86～89頁。
- (7) 刘人鋒、『中国妇女报刊史研究』、中国社会科学出版社、2012年、280～309頁参照
- (8) 陳珍玲という人物の経歴は明らかでない。章需琳の研究では「陳珍玲」は実際に存在した人物ではなく、男性編集者らが捏造した女性名の可能性があると論じる。章需琳、「性文化与期刊出版:以『玲瓏』(1931-37)為例」、『近代中国婦女史研究』、第25期、2015年6月、179頁。
- (9) 原文「它是我們全國婦女唯一的喉舌，解決我們痛苦和煩悶(中略)内容は這樣的豐富，正導婦女唯一的生路，可謂是『婦女必携』了」、「給姊妹們」、陳珍玲、『玲瓏』1931年3月18日(通巻第1号)、5頁。
- (10) 呉桐によれば、『玲瓏』の販売網は中国の国内主要都市だけではなく、シンガポール、フィリピン、インドネシアなど中国人の集まる東南アジア地域にも及んだ。同注2、呉、262頁。
- (11) 李克強、「『玲瓏』雜誌建構的摩登女性形象」、『二十一世紀双月刊』第60期、2000

- 年8月、92～98頁。
- (12) 孔令芝、『从「玲瓏」雜誌看1930年代上海現代女性形象的塑造』、稻鄉出版社、2011年。
- (13) 同注2、吳、261～274頁。
- (14) 米井由美、『「姉妹たち」に告ぐ—雑誌『玲瓏』〈玲瓏信箱〉欄にみる読者の様相』、『人文学報』(513)、首都大学東京人文科学研究科人文報編集委員会、2017年3月、155～172頁。
- (15) 同注8、章、118～190頁。
- (16) 原文「于今歐各國。号稱文明，然考其文化，其發源之歷史，多在我國之後」、林沢民、「摩登女子之明鏡」、『玲瓏』1931年3月18日(通卷第1号)、19頁。
- (17) 原文「我們雖然痛恨日人。但對於那些有尚武精神的女學生。實在有說不出來的敬佩」、無名、「日本の娘子軍」、『玲瓏』1932年10月19日(通卷第71号)、967頁。
- (18) 赵纲·张宇龙、「浅谈『玲瓏』杂志的编辑特色和文化品位」、『陕西广播电视大学学报』第21卷第1期、2019年3月、65頁。
- (19) 姜卫玲、「民国时期『玲瓏』杂志的办刊特色」、『新闻战线』2018年第9期、111頁。
- (20) 「現在、『玲瓏』が100期まで出版できました。この小さな出版物が、思いかげず100期の記録を突破できたことを考えると、どれほど嬉しいことでしょう。第1期創刊号が出版されたばかりの時点では、私たちはただやちよとした試みがしたかったにすぎないのです」、陳珍玲、「写在二周年百期記念特刊、『玲瓏』1933年6月21日(通卷第100号)、935～936頁。
- (21) 原文「你們要念著担負國家社會前途的重大責任」、陳月華女士、「摩登青年」、『玲瓏』1931年5月19日(通卷第11号)、365頁。
- (22) 原文「我國仕女。近對於運動。雖漸見注意，但尚未普及(中略)作輕易之運動。如此身體必健康」、茉莉、「運動與中国」、『玲瓏』1931年3月18日(通卷第1号)、25頁。
- (23) 藤井得弘「近代上海の健康美とおっぱい」、武田雅哉編『ゆるるおっぱい、ふくらむおっぱい：乳房の図像と記憶』岩波書店、2018年、136頁。
- (24) 原文「女士向任日本大阪毎日新聞社記者，以職業女子，而能醉心體育，卒將日本婦女界之精神，揚掄於全世界，吾國姊妹聞之不愧煞乎」、東光、「死矣日本女運動家」、『玲瓏』1931年8月12日(通卷第22号)、804頁。
- (25) 例えば、「千葉縣底海女生活」(『玲瓏』1936年3月11日通卷第227号、636頁)という記事がある。
- (26) 例えば、松本咲江の「ゆるる乳房—杜就田編集時期の『婦女雜誌』「医事衛生顧問」における身体論を中心に」(饗養(16)、中国人文学会、2008年)などの「胸の解放」をめぐる論じられた研究がある。
- (27) 原文「日本軍閥、處處以專制手段、壓迫民眾、連女子的生育、也受其監視、其猙獰の獸臉、可以想見了」、賀秀芳、「中日之婦女職業」、『玲瓏』1932年5月18日(通卷第50号)、2038頁。
- (28) 沈詒祥女士、「現代婦女何以比從前婦女好看?」、『玲瓏』1931年8月26日(通卷第

- 24号)、873頁。
- (29) 原文「白粉可說是女優妓的專用品，想不到現在如此普遍流行的」、無名、「日本女子與白粉生涯」、『玲瓏』1937年6月23日（通卷第291号）、1913頁。
- (30) 原文「我國婦女雖然沒有日本女子的消費白粉，但是香水脂粉比日本女子耗費，況且日本女子們所有的裝飾品全是國貨（中略）而我國女子卻擯棄了國產的化妝品，以購用外國貨為榮，那時根本和日本女子不同，是十分可恥的」、同注29、無名、1913頁。
- (31) 同29、無名、1915頁。
- (32) 原文「所謂的愛國，並不是指專橫地向別人侵略。爲了國家的繁榮，固應該努力，但是像強盜般向別人掠奪，是可恥的行為，而不是強國的策略了（中略）日本婦女對於這一點沒有覺著」、胡予馥、「處在被動地位的日本婦女」、『玲瓏』1933年3月29日（通卷第89号）、290頁。
- (33) 原文「現在的日本婦女，簡單地說一句，是完全處在被動地位。對於男子的意旨，她們是一半盲從，一般屈服，很少能夠表示一點反抗的意識。這種對於壓迫不表示反抗的遲滯性，又是令人感到失望的一點」、同注32、胡、290頁。
- (34) この新生活運動は「礼・義・康・恥」という伝統的な道徳を基本的な精神とし、国民生活の「軍事化・生産化・芸術化」を中心目標とし、「整頓・清潔・簡単・迅速・確實」を実施原則とし、それを「衣食住」など人々の日常生活に体现させることによって、民族復興を目指した運動である。段瑞聡、「新生活運動研究の視角とその意義」、『慶應義塾大学日吉紀要 言語・文化・コミュニケーション』(29)、慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会、2002年、28頁。
- (35) 前山加奈子、「復古・新生活運動とYWCA系雑誌にみるフェミニズム論—1933年～1937年」、『駿河台大学論叢』、駿河台大学、2003年、16頁。
- (36) 同注35、前山、16頁。
- (37) 無名、「日本の主婦」、『玲瓏』1937年4月21日（通卷第282号）、1131頁。
- (38) 無名、「日本婦女的觀察」、『玲瓏』1936年7月15日（通卷第245号）、2106頁。
- (39) 同注37、無名、1132頁。
- (40) 同注38、無名、2105頁。
- (41) 原文「完全是以養成賢妻良母爲中心。高等女學注重烹飪，家事等科目，作爲將來結婚的準備」、無名、「日本的婦女生活」、『玲瓏』1936年7月1日（通卷第243号）1952頁。
- (42) 原文「日本女子，更加是一種最可笑的矛盾的人。她們都受過很好的教育，但是她們人就捧著了祖傳的兒女經，謹守著婦規婦道。把男子當做一種神聖的，非服從不可的人」、徐靜貞、「日本婦女的地位」、『玲瓏』1933年2月8日（通卷第84号）、148頁。
- (43) 原文「中國的專科以上學校，也照樣設一個結婚科，豈不是很好？」、無名、「美國大學里的一門科目」（筆者注：内容は日本のことである）、『玲瓏』1936年10月21日（通卷第258号）、3186頁。
- (44) 原文「到花嫁學校上課，學習家事，所以日本女子都能把家庭管理得井井有條」、同注43、無名、2105頁。

(45) 呉咏梅、「モダニティを売る－1920～30年代上海における『月份牌』と雑誌広告に見る主婦の表象」、『アジア女性と親密性の労働』、落合恵美子編、京都大学学術出版会、2012年、136頁

(46) 熊月之編、『上海通史』第9巻、上海人民出版社、1999年、47頁。

(東北大学大学院)